

Annette :

Tu es venu, ta main me prend, — je baise ta main.  
 Et comme, avec effroi, — je baise ta main.

Tu es venu pour me défendre, Amour, je suis bien  
 Avec genoux tremblants, vers toi d'écouter! — je baise ta main.

Tu m'as le front et tu le jette, mais mon cœur rien!  
 Bênie la place que font tes dents! — je baise ta main.

Tu me veux toute quand tu es tout, tu n'en fais rien,  
 Tu ne baises que des mots. — je baise ta main.

Ta main qui me caresse, va me fuir demain.  
 J'attends, en la baignant, le coup mortel de ta main.

Tue-moi! Frapper! Quand tu me fais mal, tu me fais bien,  
 Tu me délivres, destruction — je baise ta main.

Chacun des corps qui m'embrassent compte un être,  
 Tu arraches deux chaînes. — je baise ta main.

Tu brises la prison de mon corps, mon assassin,  
 Et par la brèche fais mon vie. — je baise ta main

Je suis la terre blessée où lèvera le grain  
 De la douleur que tu sèmes. — je baise ta main

Sème la douleur saine! que mûrisse en mon sein  
 Toute la douleur du monde! — je baise ta main,  
 je baise ta main —

Yvain Hollard

## Annette

Tu es venu, ta main me prend, — je baise ta main.  
Avec amour, avec effroi, — je baise ta main.

Tu es venu pour me détruire, Amour, je sais bien.  
Mes genoux tremblent, viens! détruis! — Je baise ta main.

Tu mords le fruit et tu le jettes : mords mon cœur tien!  
Bénie la plaie que font tes dents! — Je baise ta main.

Tu me veux toute : quand tu as tout, tu n'en fais rien,  
Tu ne laisses que des ruines. — Je baise ta main.

Ta main qui me caresse va me tuer demain.  
J'attends, en la baisant, le coup mortel de ta main.

Tue-moi! Frappe! Quand tu me fais mal, tu me fais bien,  
Tu me délivres, destructeur. — Je baise ta main.

Chacun des coups qui m'ensanglante rompt un lien,  
Tu arraches chair et chaîne. — Je baise ta main.

Tu brises la prison de mon corps, mon assassin,  
Et par la brèche fuit ma vie. — Je baise ta main.

Je suis la terre blessée où lèvera le grain  
De la douleur que tu semas. — Je baise ta main.

Sème la douleur sainte! Que mûrisse en mon sein  
Toute la douleur du monde! — Je baise ta main,  
Je baise ta main...

Romain Rolland

アンネ・ト

おんみは来た、おんみの手が私をつかむ。——私はその手を接吻する。

愛を以て、恐れを以て、私はその手を接吻する。

「愛」よ、おんみは来たか、私を砕きに。私には良く判る。私の膝はふるえる。来るがいい、砕くがいい！ おんみの手を接吻する。

おんみは果実を噛み、又それを吐き棄てる。噛め、おんみのものである私の心を！

祝されよ、おんみの歯によって作られる傷よ！——私はおんみの手を接吻する。

おんみは私の全部を望む。然しそれをおんみが持つと、おんみはそれを全く軽視し

後にただ廃墟のみを遺す。——私はおんみの手に接吻する。

今、私を愛撫するおんみの手は、明日私を滅ぼすだろう。

私はそれを待つ。その手に接吻しながら、その手の致命的な打撃を待つ。

私を亡ぼすがいい！ 打つがいい！ おんみの与える禍は私には恵みだ。

破壊者よ、おんみは私を破壊しつつ、私を解脱させる——私はおんみの手に接吻する。

私に血を流させる打撃の一つづつが絆を切る。

おんみは肉と共に鎖を切る。——私はおんみの手に接吻する。

おんみはわが肉体の牢獄を砕く。私を殺す者よ。

わが生命は割れ目から脱れ出る。——私はおんみの手に接吻する。

私は傷ついた土地だ。そこから

おんみの植えた悲しみの種子が育つだろう。——私はおんみの手に接吻する。

聖なる悲哀を植えよ！ 私の胸に

世界のあらゆる苦悩よ、実れ！ 私はおんみの手に接吻する。

私はおんみの手に接吻する。

ロマン・ロラン

(片山敏彦訳)

## 目次

詩・アンネット（原文と訳）	……………	ロマン・ロラン （片山敏彦訳）
「魅せられたる魂」を語り終えて	……………	重本恵津子 …… 1
ロマン・ロランを語る	……………	尾埜善司 …… 6
ロマン・ロランを語る	……………	今江祥智 …… 11
あとがき	……………	16
ロマン・ロラン没後五十年記念の催し・御案内	……………	17

## 「魅せられたる魂」を語り終えて

重本 恵津子

(作家)

去年（一九九三）の夏と秋、二回にわたってロマン・ロラン研究所の御厚意で、公開講座の一貫として「魅せられたる魂」を語らせて頂いた。大正から昭和にかけて、心ある日本女性のどれほど多くの人がこの作品から勇気と励ましを与えられたらうか。その秘められ隠された喜びと感謝の声が押さえがたく噴きこぼれて「『魅せられたる魂』と私」というテーマがしばしば書かれたり語られたりする。私もその一人だが、その私が、「私」をぬきにして純粋に作品だけを語ろうと思いはじめたのは十二年前のことである。

東京中野の三十人くらいの主婦の読書会サークルに呼ばれてこの話をした。まず驚いたのは、この作品を曲がりながらも読んでいる人は四人しかいなかったことである。読書会のサークルにしてすでにそうである。しかしその中に一人、少女のように髪を切り揃えた三十前後の盲目の女性がいた。その女性は「魅せられたる魂」というテーマを耳にして以来、どうしても聞きたくて盲導犬に導かれて会場へ来たという。「ロランの世界を初めて知りました。何か遠い本国からの便りを聞くようでした。」その女性は眼を閉じたまま、静かに感想を言われた。私の方が参ってしまった。それ以来、あくせくと忙しい日本人に、魂の本国の消息をロランを通して語りたいと思うようになった。それにはまずロランを読んでもらわなければならない。その導入の手がかりとなるように、いきなり物語を語り始めようと思った。一ばん避けなければならないことは大学の講壇ふうになることである。でも私は本職の声優でも俳優でもない、どのように語ればいいのかだろう。

私はもともとロシア文学畑の出身だから普段の講演ではよくトルストイを語る。これは助かる。「アンナ・カレーニナ」にしろ「戦争と平和」にしろ繰り返して映画や芝居になっている程、物語性に富んでいるからである。その点ではまた「魅せられたる魂」も同じであった。激烈な議論や深遠な哲理をふくんでいながらドラマティックで多彩な人間像と、人間心理の機微をついた描写は巧まない物語性となって人の心を惹きつける。殊に前半がいい。ロランのもっとも氣力横溢した時代のものであるから、作品も青春のアンネットのようにみずみずしい。アンネットがロジェを拒否して未婚の母になってしまふところなどは、三十年前の一般日本女性なら承服しなかつたかもしれないが、今は誰もがうなずいて真剣に聞いてくれる。最後のロジェとの会話の行き違い、そのアイロニーには軽い笑いさえ起こる。「私の心情も感覚も体も私自身のものであって、しかも私自身のものではない。それはもっとも奥深い魂のものであって、自分が勝手に取り扱ふわけにはいかない」というアンネットの言葉を伝えたとき、講演終了後、若い女性が近寄ってきて、「今まで自己に忠実に生きることが一ばんいゝことだと思つてやつてきたんですが、自分はなんてお粗末で愚かだつたらんだろう、と氣がつきました。」と訴えてくれた。

未婚の母になつただけでなく、破産して無一文になり、ブルジョア階級から転落してしまふアンネット、からだも心もすりへらして日々のパンを稼ぐアンネット、その時初めて世に開眼するアンネット、科学者ジュリアン・ダヴィとの恋愛と別れ、息子マルクとの非情な関係、パリの有名な外科医ヴィヤール・フィリップとの肉の愛とその妻ノエミとの闘争、こうした息づまる展開を経て物語は前半のクライマックスに駆け上つていく。十八才のマルクが初めて大臣のロジェが父親であることを知るのだ。即日、会いにいった演説会場で、若者を戦場に駆りたてるべく、長広舌を振るっているロジェを見てマルクは愕然とする。そして彼の前に初めて母親の眞の姿が立ち現れるのだ。私はここまでを一時間半にまとめて話す。聴衆に面を向け、肉声で語ることで、すでおのれを曝しているのだから、自分の意見はなるだけ述べないようになっているがどうしてもコメントめいたアドリブが入ってしまう。女性の自立も孤独も、

階級闘争も反戦運動も、ロランが生言葉で述べているところは一切省いて、情景描写と人物描写と会話と流れだけで、ロランの思索と思想を聴衆に伝えなければならぬ。こんな語りを繰り返しているうちにいつのまにか「世界文学の語り部」と呼ばれるようになった。しかし、これは雑誌編集者が勝手につけた名前前で、ふだんは細々と、文学畑でものを書いている人間である。

後半、「予告する者」、これはもう一時間半にまとめる原稿書きの段階で頭がハチャメチャになってしまった。なにしろ、宮本正清氏が十年かかって訳された長篇原稿、みずず書房の部厚い三巻本を無暴にも三時間にまとめようというのである。あの話もこの話も押し込めたいが、結果としてはばっさばっさと切り捨てることになった。第一、後半にはアーシャという女性が登場してくる。マルクの妻になるロシア女性である。これがなかなか手剛い。それにいささかロボットめく。二十回近く話した聴衆の反応では、ちょっと、アーシャをどう理解していいのかわからないという戸惑いの表情が多い。それから新聞社の「人喰い鬼」チモンとアンネットの関係が始まる。このあたり少々荒唐無稽な感じがしないでもなく、ロランの筆にいくらか疲れがでてきたのかな、と思う。この辺からソ連の革命とイタリアのファシズムが強大な顎を覗かせてくる。ついコメントしたくなるのを押さえて城館シタールでの大金持ちたちの狐狩りならぬ裸女狩りの話をする。この話をたゞの「怪奇篇」としか受け取らない聴衆もいるのだが、私の古い友人で、女性学もやり市会議員もやっているのが、「今のセクハラも、当時のすさまじいセクハラに較べれば他愛なく見えるわね、やっぱり時代は進歩しているのかしら」と、ともに受け止めてくれた。

アンネットの異母妹、シルヴィも抜かずわけにはいかない。この鋼鉄のハートと魔法の指を持ったドライで現実的なバリ女の骨頂。シルヴィのことだけを一時間半にまとめていつか話してみたいと思うほど、多彩で複雑だ。

物語の大筋には入らないので京都でも割愛したが、シルヴィがマルクの死を知って、モンマルトルの二百二十五段の石段を片足ひきずって登り、祈りに祈った挙句、白い聖母を蹴倒すところ。マルクの遺骸と共に汽車で帰ってくる

アンネットを涙一つ見せず駅頭で迎え、一晚を姉妹が同じベッドで過ごして涙の川を作ってしまうところ。しみじみと私は話しかかったのだ。シルヴィが花の香りのする夕べ、アンネットの腕に抱き止められて来世を語りながら死んでいく細部、ここにはロランの東洋的というか汎神論的な息吹きを感じられてどうしても話したいところだ。汎神論といえばイタリアのキャレンツィア伯爵もまたロランの思想の一端を担い、ヨーロッパ世界とは別の豊穡で神秘的な物語を産み出すキャラクターである。だから語り始めれば一時間はゆうに過ぎてしまっただろう。だから、ばっさりということになる。

こうしてロランのすばらしい大河小説を切り刻んで一体私は何をしたんだろう、と講演の夜はたいいてい深い絶望感に襲われる。あらゆる楽器の、対位法があり、フーガがあり、ポリフォニーがあるからこそ美しい偉大な交響楽を私は単なるピアノソロにしたのではないだろうか。

十三年前、東京のロマン・ロラン研究会（蜷川讓氏主宰）がまだ健在だった頃、二十三人のメンバーでロランの遺蹟を巡ったことがあった。ブレーヴの丘の質素なロランの墓に連翹がレモン色の蝶のように枝垂れていた印象は今も忘れ難い。いつの日かまた一人でお参りして、切り刻んだお詫びを言わなければ、来世で顔も合わせられない思いだ。わずかの救いは聴衆の反応である。テレビは毎日凡百のドラマを放映し、本屋には洪水のようにベストセラーが溢れているが、「魅せられたる魂」のような本物のフェミニズム、魂の交響楽、生命の突風は絶えてない。せいぜい「マディソン郡」くらいで惰眠を貪っている平均的的女性たちは「……魂」を聞くともまるで横ビンを喰らったようにと眼を覚ます。彼女たちの驚異にしばれてゆく眼、それがたまらない。「そうなの、これがロランなのよ。私たち日本人の日常感覚では想像もつかない別の人生、別の消息があるのよ。」

眼を醒ますのは一瞬かもしれない。明日になればまた眠りこけるかもしれない。けれどもあの驚きの眼は真実だったな、純粹だったな、と思うのである。

全く別のことだが、最後に付加させてほしいことがある。

私は去年から今年にかけて「詩人尾崎喜八の妻」についての評伝を書き、さき程、脱稿したばかりであるが（今秋出版予定）、ロマン・ロラン友の会の会の一員であった尾崎喜八が、途中から戦争協力者の烙印を押されて仲間はずれにされてしまったことが、どうにも腑に落ちない。彼の詩文集全十巻（創文社）を丹念に読んでみると、痛烈な反戦詩もあって、その一篇があるために、軍部によって発売を禁止されたアンソロジーもあるのだ。（「明治大正昭和詩人選南有集」昭和七年東北書院）

フランス文学者の河盛好蔵氏は「彼の戦争中の詩は、働く人のよるこびを歌った勤労詩の範囲に入るもので、戦争讚美の詩などでは決してない」と言っているし、また詩人の三好達治氏は「恐らくこれらの作は、百年の後にまた新しく歴史的意義を加えて人々に興味深く読み返されるだろう」と言っている。

噂や烙印だけで人の業績や人格まで判断してしまう風潮が芸術界や文学界にもまかり通っているのである。若い人たちはそうした先入観なしにありのまゝの感性で尾崎喜八の作品を読んでほしい。

夫人、娘ぐるみで親しく、ロマン・ロランと文通を交わした尾崎一家は、毎年一月二十九日にはロランの写真の前に花を飾って一家中で彼の誕生を祝った。これは終生続き、喜八が一九七四年二月四日、鎌倉の額田病院で病没する数日前も、夫人によって、病床の喜八が見やすい位置にロランの写真と花が飾られた。ロマン・ロランに対する敬慕は生涯、続いたのである。

## いま、ロマン・ロランを語る（続）

尾 埜 善 司

（弁護士）

五年目のロマン・ロラン公開講座で、童話作家の今江祥智と弁護士尾埜善司が「対談」していると、忽ち一時間半が過ぎました。

今江さんの年譜（『今江祥智の本』月報22）には戦後始めて一九五〇年に友人の名が現れ、それは松居直さんです。不思議な感じです。二年前十七才の夏『ジャン・クリストフ』にめぐり合い、ロマン・ロランに傾倒していた私は、京大に入ると同志社大でロラン展が開かれると聞いて駆けつけました。様々な国の訳本、写真、誰か手書きのポスターの配置に熱愛がこもり、同年配の色白の角帽が寄って来て今江祥智と名乗りました。しばらくして大阪阿倍野筋の古本屋「藤井天海堂」でまたバッタリ出会いました。「本を盗むと目がつぶれる」と書いて本棚の横棧に貼りつけてあります。前の電車道を行きつ戻りつ三時間もロマン・ロランを夢中で語り合いました。今江さんはこの「対談」のために、絵具絵筆を買い揃え、二人の肖像も描きこんで、あの手書きのポスターを見事に再生して持参されています。ロマン・ロランが結んでくれた四十四年の友情が心に滲みます。

最初のロラン全集が毎月みず書房から始めており、日本・ロマン・ロランの友の会も結成され、てんで勝手な要望をみず書房へ書き送ると、いつも青木やよひさんから懇篤なご返事が来しました。「人生はロマン・ロランの踵かかとで大きくぐると廻り」全体の方向が定まり、ロランの結ぶ友愛の輪が、心の世界が拡がってゆきます。——京大へ入るとすぐ宮本正清さんをお宅に訪ねましたが、二十四年を経て喜寿のお祝いの時、先生は私に近寄って「あなたが始め

て私の宅へ訪ねて見えた時のこと、よく憶えてますよ」と言われ、本を下さいました。先生の二十才台の詩集『生命の歌』の新装版でした。初めてお宅を訪ねた日の日記は、前の年出版され感動したこの詩集の詩句で結ばれていたのです。―《一日の生活を まこと生くる者の上に 光あれ》

姥原徳夫さんに東京から来てもらおう。今江さんと共謀して出したお願いの手紙が成功し、初めてお目にかかれ、それが機縁になり宮本さんのお招きで大阪市大へ赴任されました。私のおふくろは止宿先へ心づくしのお弁当を持参し、今江さんと私と三人でロランを語りつつ愉快に歩きまわり、私の家で夜を明かしました。三年後、司法修習生になつて上京すると片山敏彦、山口三夫、清水茂さんたちが集り迎えて頂き、山口さんは私を巷に連れ出し高粱酒の飲みっぷりを伝授しました。学生最後の夏休みを迎えた今江さんは、生まれて初めて給料をもらった私に誘われ、生まれて初めて上京して来ました。日本児童文学史に特筆されるべき事件であります。片山宅を訪ね、カレーと信州ブドウ酒をご馳走になり、火事の時すぐ持出せるようトランクにつめたロランの手紙や写真を拝見しました。先生は小さな庭に立ち、鮮やかな金仙花を指さし「デュアメルの大好きな花です」と言われました。私は「クリストフ」の次に片山さんの著書『ロマン・ロラン』に感動しましたが、とりわけ作家シャトールブリアンの次のような思い出話は忘れられません。―

「生きることの激しい苦悩と不安に耐え切れず、ある冬の晩ロマン・ロランの所へ行つた。小さな一つの灯に照らされた部屋で長い間、心の重荷、苦しみのあるありたけを師である人に打明けた。私は語り終つて眼を挙げた。ロマン・ロランは、まっすぐ不動で私という難破船に目を注いでいた。まなざしは限りない慈愛に満ちていた。彼は黙っていた。異常な無言だった。唇が小きざみに震えていた。かすかな波の動き。言語に表現できない「言葉」の息がただよっていた。この沈黙を通じて私は自分の求めていたものを見た。自分を越えた上方を垣間見た。これこそ魂の贈物であった。強い呼びかけであった。私はその呼びかけに促されて、泣きながら師の肩へ取りすがつた。私は心が慰めら

れ、いやされた。……」

そのころ心の悩みを抱いていた私は、ここの所を声に出して読み、読みながら泣き、いやされました。ロマン・ロランの存在の波動が直かに感じられるのでした。

京大へ入ると、ロマン・ロランの友の会の会合が、既に毎月開かれていて、早速参加しました。この関西日仏学館の教室で開会を待っていると、品のよい母娘らしい二人が並んで腰掛け、一冊の本を眺めている姿が目立ちました。本は高田博厚の新刊『フランスから』、お二人は湯川秀樹さんの師、玉城嘉十郎教授の未亡人とピアニストのお嬢さんで、その日『理性の勝利』を話される波多野弥さんの婚約者でした。三年後、卒業の夜、私は玉城邸でお祝いして頂き、酔っぱらって波多野さんとダンスし、二階に泊ってお昼すぎても降りてこず、ご心配をかけました。懐しい玉城のおばさんは、私の結婚式に「尾上の大松のごと生い茂り 世のたいらぎの力たれ君」と、壮大な歌を詠んで下さいました。

あの『フランスから』のなかの「師」というエッセイは、高校二年の冬にもう読んでいました。阿倍野筋近くで通りがかりの新本屋へ入ると「高原 ロマン・ロラン特輯」というぶ厚い雑誌が目にとまり財布の底をはたきました。みずずの小尾俊人社長の論文を読んで骨太な人だなと思ひ、高田さんの「視」特に、引用されたロランの『内面の旅路』のなかの「周航」の次の文章に、深い感銘を覚えたのです。

「若い時から人生にはっきりした目的を定め、道を外さずにその計画を実現しようとする者は、生涯の日々の不確かな変動を克服するべく自分の頑固な枠組みを自分の時間に強いることに恐ろくなるだろう。それで自らの深い運命を裏切ってしまうのではないか。運命自らのありのまままで自然な流れの代りに、意志の仕業である偽の運命をもたらすことになるだろう。」

「『死ぬ、そして復活せよ』の大原則は、人生の深い動きが持つ智恵に秘かに己れを託し、その連続性に対して

不拔の信仰を持ち、予測できない人生の流れを受諾しつつ、繰返し改まるものへ勇敢に参加し、未来へ切実に己れを委ねる行為にある。それは内心の光が輝き出す大きな時に、我々が日常生活の必要から持っている意志よりも賢くて高い「意志」を感得することにある。我々の過去、現在、未来の時間全体を包みこんだ「意志」「我を超えたもの」それは我々の日々の「自我」をまちがわせも否定もしない。それは様々な「自我」を集め、首飾りの珠を赤い糸が通すようにまとめる。そして最後の珠は最初の珠と出合う……」（以上の引用文は、尾埜の試訳です。）

ロランはゲーテの思想についても、『死ね、そして復活せよ』と併せ、『両極性と上昇』つまり螺旋形に昇る全体方向を「自然の二大動輪」とする考えに同調しています。

個我を包んだ大我、非人格的な永遠の「存在」が直観され、これは魂の奥から湧き出て、やみがたい傾斜に沿うて流れて大洋に注ぎ、雲となって河の源を養い、創造の円環運動は休まず続く。△わが山に流れてやまぬ山水の やみがたくして道はゆくなり▽（高村光太郎）その息吹きである宇宙の最も深い「法則」に絶対に帰一して進むことが、最高の自由である。個々の自我は大我との間を断えず往還した我のエネルギーで生きつつ、マーマヤ（幻影）のヴェールを一枚一枚剥ぎ取り、遂には裸の実体Ⅱ「死」（生死をこえた死）によって完結、解放される。（「魅せられたる魂」という題の意味）

八十六才の親鸞は、阿弥陀仏は右のような至高の「法則」を知らせる手だてであると説き、それは「死」であると森三樹三郎さんは断じました。

このような宇宙的な思想は、実に二十才の日記や論文（全集26、19）に早くも全的に新鮮に思考、表現され、後年『生けるインドの神秘と行動』（全集15）に熟成し、円環・螺旋思维や深層心理が深く検証され、ユニテの本質も究められています。大戦中に書かれた井筒俊彦『神秘哲学・第一部』の巻頭には、ロランの言葉「およそ思维に属する一切を包括し、全てを調和させる広大な仮説を思维は渴望している。」（『エンペドクレース』）が掲げられました。

ロランの思想の本質を知るには「ヴィヴェカーナンダの生涯」の詳細な「補遺」の熟読検討が不可欠と思います。(一九二六年当時、注で推された本のうち、オットー「西と東の神秘主義」の訳が漸く昨人文書院から出ました。)

ロマン・ロランがインド神秘思想を究めつつ反戦反ファシズムの戦いに参加したのは矛盾分裂ではなく、後者は前者の必然の結果でしょう。しかし他方、ロラン家は父まで八代続いて公証人でした。フランスの公証人は法律家としての役割が重要で、ロランは父方の合理精神とコラの笑いを承継しています。平和主義者の彼は「クリストフ」創作中、道で自動車にはねられ賠償裁判を起こし法廷に出むいて弁護士を声援しています(未だ大正の頃)。この「両極性」がロランの思想と行動の本質です。彼によれば、アンネットは到達不能な「真理」に代る「調和」を生涯求めましたが「調和」とは、日本的な和とか世間的な談合とは本質が全くちがいます。

先週の毎日新聞で、さる女性がアンネットは非婚の母として偏見と悪意に抗し「女性の時代」を生き抜いたと述べ、日本で婚外子の法的差別を無くす措置がおくれている現状を批判していますが、けさラジオの学生合奏コンクールの発表で、大都市圏を離れた地の小学生八十名の交響曲演奏を聞き「調和」の見事さに驚きました。

いま若人の、あらゆる世代の求めているものがロマン・ロランのなかにあります。今江さんもロランを作品にして下さる由、私は時を待てばよい。あ、ロランのふるさとかブルゴーニュのワインが宅急便で届きました。コラ・ブルニョンを讀んで、乾盃!

## いま、ロマン・ロランを語る

今江 祥智

(童話作家)

1

私共が若い頃、この國でずいぶん読まれた詩人にルイ・アラゴンがいました。その詩の一つ「エルザ・ワルツ」に、ルフランのように繰返し出てくる詩句があります。

「それから人生は 夢の踵でぐるりと廻った」

「それから人生は 硝子の踵でぐるりと廻った」

「それから人生は 激動の踵でぐるりと廻った」

といったふうに…。

その詩のように言うならば、私の場合は、

「それから人生はロマン・ロランの踵でぐるりと廻った…」ということでしょうか。

ロランを読んだために、とりわけ「ピエールとリュース」や「魅せられたる魂」を読み、深い感銘をうけてロマン・ロラン研究会をつくったがために、私の人生は大きくぐるりと廻った—と云ってよろしいでしょうか。

研究会に最初に申込んで下さったのが松居直さん（現在、福音館書店会長）。顧問を快諾して下さったのが新村猛先生。大胆にもロラン展を開くというお持ちのロランの本を惜し気もなく貸して下さったのが宮本正清先生。片山敏彦先生は「ロマン・ロラン」と題した長詩を書きおろして下さった。

こちらはまだ十代のおわりごろの少年ですよ。それをちゃんと一人前に扱って下さった。そしてその展覧会を見に来てくれて、以来四十年以上も友達つき合いを続けて下さったのが、今回ご一緒する、今は弁護士尾善普司さんでした。今思いますと怖いほど贅沢な人間つき合いのロンドが、ごく自然に、あたり前のことのようにひろがっていきました。ロランの作品というのは、読んだあとで誰かと語り合いたくなる、何かそうしたエネルギーみたいなものを抱えていたように思います。

このところたて続けにすばらしい本をお出しの須賀敦子さん（イタリア文学者。「ミラノ・霧の風景」「ヴェネツィアの宿」など）が、先だって雑誌「ちくま」の連載でクロード・モルガンの『人間のしるし』のことを書いてらした。この本も私共が若い頃、ずいぶん読まれたものでした。男女間の友愛についての新しいモラルの提出があった。新しい女性の生き方について掘りさげていた。私なんかも、何人もの友達と何時間にも亘ってこの本について話し合いました。須賀さんも同じような体験について―そのあと人生を歩み続けてきて―今にして思えば…というぐあいに書いてらした。本と人との出会いということでしょうね。

その頃はTVはないし、情報も少いし、本も少い。そのおかげで一冊一冊の本、一本一本の映画についても、また、その頃初めて見たビュッフェの絵やパウエル・クレーの絵についても、お互い、時間を惜しまずに話しました。モルガンの本もロランについても、だからじっくり話し合えました。研究会が終ったあとにも、反戦デモにいった帰りにも、京都御所の芝生に坐り込んで、アンネットとシルヴィの生き方のちがいやら、クレランボーやコラ・ブルニョン親方の生きっぷりについても、長いこと話し合ったものでした。「ピエールとリュース」を映画化した『また逢う日まで』（今井正監督作品）を見たあとなんか、同志社から上賀茂の下宿まで歩きながら話し、引返ってきて御所の芝生で話し、また下宿まで歩いていきながら話し、夜あけまで話し込んだものでした。そしてこれから先、自分がどんなふうに生きていくだろうかを、さまざまに夢想したものでした。

ロランについて触れられているものなら、何でも探し出して読みました。そうして知った高田博厚さんや渡辺一夫さんや加藤周一さんの本も次々に読みました。厚顔ましく手紙も書いた。野田良之先生（フランス法の大家）に小生意気な「反論」めいた手紙を書いたらば、便箋十何枚もの返事をいたゞきました。ヨーロッパで現実に無神論者として生きることの難しさについての悩み—というものでした。何という誠実さ。

後年、私はヤコブセンの「ニールス・リーネーある無神論者の生涯—」という長篇小説を何度か読み返してようやくそのことの意味を具体的につかまえることができてショックをうけました。とにかく専門の領域をこえた先生がたが、ロランに関することについてなら、そんな若僧相手でも、ちゃんと感えて下さった。今から思いますと、勿体ないような対応でした。渡辺一夫先生も何枚も葉書でお返事を下さった。今どきの若い人たちと大学の先生がたとも、そうした交流がありますとよろしいのですが…。

2

ところで、ロランのことを話すとき、どうしても触れたいのは、新村猛先生のことです。ここでも話していたゞきました。先生が、そのあと亡くなってしまわれました。

先だって著作集（全三巻）の第一巻が出ました。「ロマン・ロラン」。先生のロランについて書かれたものが全部収録されています。その「解説」を書かせていたゞいたものですから、実に三十五年ぶりに先生の「ロマン・ロラン」（岩波新書）を讀返しました。東京から青森までゆっくりと汽車にのっていつて讀み返しました。とてもゆつたりした時間でした。

先生は戦争中、フランスの左翼の作家たちの紹介をなさったのが、高に生まれ、三年半ばかり投獄されていました。そのイメージや、ロランの政治的論文集「闘争の十五年」の訳者ということもあって、何か急進的なロラン像が書かれているもの—昔は期待して、とびつくように讀んだものでした。今度讀み返してみますと、いや、ちがっ

ていました。おそろしく忍耐強く、ロランを公平に読みこもうとなさっていたのです。

今回読み返して改めてその感を深くしました。急進的というよりも根元的（根本的）にロランをとらえようとされていることがひしひしと分りました。多面体だったロランのいろんな面に出来るだけ公平にちゃんと触れるべく、音楽、戯曲、小説、思想、政治的な考察や行動……と、実に丹念に読みこみ考えて書かれていました。今回読み直してみても、そこがちよっとちがうんだ、とようやく分りました。まったく不肖の「弟子」であります。

\*

ところで今回の「対談」のことをいろいろ考えながら、私は昔描いてたようなロラン研究会のポスターを「再現」しようと思いつきました。絵具絵筆を買い揃え、描いてみました。描いている内に、あの頃のことを実にさまざまに思い出が、こみあげてきました。そしてもう亡くなってしまわれた新村先生、宮本先生、片山先生、それに蛭原徳夫先生……が、若い者たちに、どれほど寛大寛容に接して下さったかの思い出が、しみじみとよみ返ってきました。

当時私共は、それをごく当り前のことのように思い、ずいぶんと不躰けなことを先生方にしてきたにちがいはありませんが、どの先生も誠実で寛大でした。私も女子短大で十五年ばかり教師をしてきましたが、いつもあのとときの先生方のつき合い方が胸にありました。若い人とどうつき合うか。これについてもロランがきっかけで、私はいろんなことを学ぶことが出来たことを深謝しています。

さてまたアラゴンの詩をちよつと借りましょうか。

「人生とは、おしまいまでつき合ねばならぬ物語なのだ……」

私ももう六十二歳。ロランなら「ベートーヴェン研究」の「エロイカよりアパシヨナータまで」を出し、戯曲「獅子座の流星群」を出版していた歳です。そのあとまだまだ大きな仕事がどっさりあります。「生けるインドの神秘と行動」、「魅せられたる魂」の完結。「革命によって平和を」を出したのが六十九歳。ベートーヴェン研究を完結し

たのが七十七歳。翌年亡くなったあとで大著『ペギー』が出ています。革命劇のおしまいの『ロベスピエール』も七十三歳のときに書いています。自伝『内面の旅路』が七十六歳。いやもう亡くなるまで現役の活火山でした。（\*死後二冊出て完結）

そのことを思い出すと、私なんぞまだ若僧、かもしれませぬ。いま、私がこれからしたい仕事の中に、『きみはロマン・ロランを読んだか?』というものを入れたくなっています。ロランにルソーの選文集編集の一冊があり、アラゴンにヴィクトル・ユゴーの選文集『きみはユゴーを読んだか?』があります。そのひそみにならい、私も自分が『恩義』、人生の恩義をうけたロランを、今の若い人たちに読んでもらうための一冊の選文集を編み、それに簡潔なロラン伝をそえた一冊をつくりたくなっています。

昨年、四日市の「メリーゴーランド」という子供の本専門店で八時間の特別講義をしましたが、そのとき、クロード・モルガンやヴェルコールという『抵抗作家』と、フランスのレジスタンスの時代と文学について話してみたことがありました。きき手は二十代が圧倒的に多かった。今の子供の本にインタレストをもってる若い人なのです。それがちゃんとうけとめてくれました。ヴェルコールの本を貸してほしいという申し出があつて読み出した人が何人もいた。

今、総糺なしみたいに情報たれ流しの中で溺れそうな若い人たちに、ロランをもう一度『復活』させるにはどうすればよろしいか、私は真剣に考えています。カルヴィーノもカーヴアーの文学も面白い。ウンベルト・エーコもクンデラも面白い。しかし、E・M・フォースターをゆっくり読み直すように、ロランをゆっくり読み直すのもよろしいのではないか。私は自分なりにそのお手伝いをしてみたいと思うようになっております。

## あとがき

一 重本先生の公開講座「魅せられたる魂」は絶大な好評と支持をいただき、主催者として大へん嬉しく存じております。先生に語り終えての御感想をお書きいただきました。この本の未来への大きな展望力、力づよいはげましを感じております。

一 「魂」の二巻「夏」のなかにあるアンネットの詩があります。内面から噴き上げる力に押されて机に向かつてアンネットが、詩のリズムのなかに自分の悲しみを注ぎこむ部分

—「汝は来れり、汝が手はわれを捉う—  
われは汝が手にくちづけす。

愛とて、怖れもて—われは汝が手にくちづけす。……—

(全集版第一巻四二五頁)

この部分の全体のロラン自筆を、今回の表紙に、原文訳文を本文巻頭におさめました。アンネットをみちびき支える宇宙の生命力の噴出。それは「嵐、巖に碎ける海の大波、潮煙りと電光をのせた魂であり、大空に向って打ち上げる情熱と涙のしぶき」(ロラン)であります。

一 アンネットの原型をなしたといわれるのはマルヴィ

ーダです。彼女については往復書簡でよくご存じと思います。彼女は若い頃は革命派だったし、ワーグナーやニーチェの友人だったし、またロンドンでは、ロシアの亡命者アレクサンドル・ゲルツェンの秘書であり、のちにその末の子のオリガを自分の養女としたのです。そのオリガの息子が、オリガ・モノー・ヘルツェンで在パリの日本人、椎名其二や森有正などとの交遊も知られております。十九世紀思想史のなかのマルヴィーダについては又、研究の大きな主題となると思います。

一 今江祥智・尾埜善司両先生の公開講座ははじめ、対談形式で楽しい時間が持たれました。活字で速記そのまの自然さを残したかったのですが、先生方が、改めて文章に整理改稿して下さいまして、本文の二篇となりました。御配慮にあつく御礼申し上げます。

一 本年はロラン没後五十年記念の催しが行われます。大要は別項のお知らせの通りです。何とぞ御期待、また御後援のほどをおねがい申し上げます。(T・O)

ユニテ部

小尾俊人 西村 明

野村庄吾 宮本エイ子

ロマン・ロラン没後五十年記念の催し

1 九月九日(金) 午後四時—五時半

「ロマン・ロランと音楽」

関西日仏学館

中野

雄氏(レコードプロデューサー  
昭和音楽大学講師)

2 十月十四日(金) 講演(三時—五時)

「最新のロマン・ロラン研究」

記念パーティ(五時半—七時) 関西日仏学館

B・デュシャトレー氏(プレスト大学教授)

「ロランとフランス革命」

河野健二氏(京都大学名誉教授)

「自然科学とゲーテ」

岡田節人氏(生命誌研究館館長)

3 十二月三日(土) 午後二時—四時

「ロマン・ロランと音楽」

講演とピアノ

関西日仏学館

岡田暁生氏(神戸大学助教授)

ピアノ演奏——ベートーヴェン、デュカ他作品

小坂圭太氏(ピアニスト)

4 十二月二十四日(土) 午後一時半—四時

おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」

京都文化博物館

今江祥智氏(ロマン・ロラン研究所理事)

映画上映「また逢う日まで」 今井 正監督 (京都文化博物館/ロマン・ロラン研究所共催)

5 一九九五年一月二十七日(金)

ロマン・ロランに会った日本人たち

関西日仏学館

小尾俊人氏(ロマン・ロラン研究所理事)

(成瀬正一から山本実彦まで)

ユニテ 第二十一号

発行日 一九九四年五月二十日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五)七七一―三二八一

郵便番号六〇六

印刷所 恒 星 社